

実践報告

生徒の社会参画を育む授業実践事例

浜松市立北浜中学校社会科教諭 増井 隆一

浜松市立北浜中学校で社会科を担当しております。増井と申します。本日は10分間という時間ですが、どうぞよろしくお願いいたします。非常に緊張しております、つたないところもあるかと思いますが、ご容赦いただけたらと思います。また、手持ちの資料にプレゼンを掲載しておりません。そこで、こちらにある資料をもとにお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

1年生の社会科を担当しております。今日も社会科の授業をしてまいりました。アフリカ州におけるフェアトレードを教材とした実践を紹介いたします。社会科における消費者教育は、主に3年生で行われています。今回は、社会参画を踏まえて、私の先輩に教わった1年生の授業が「あ、つながる」と思ったので、紹介させていただきます。

「単元 アフリカ州」の概要ですが、1年生の地理では、世界のいろいろな地域について学習していきます。その中の「アフリカ州」です。様々な学習をしていきますが、アジア州とかヨーロッパ州、それぞれの州で「学習のテーマ」があります。アジア州は、経済発展がなぜこんなに急速に進んでいるのだろう。ヨーロッパ州は、繋がることによってよいことや困ること、どんなことがあるのかなというような授業のテーマがあるのです。アフリカ州については、これまで、地理の授業でこんな原則を伝えています。これも先輩から教えてもらったことですが、「経済発展の原則がある」ということです。非常に単純化した話ですが、資源がたくさんあるか、その土地に生産を行う工場を建てるような広い土地があるか、そして労働力となる人口がたくさんあるかです。この条件が揃っていると経済発展がしやすくなるという授業をすると、「アジア州、確かに」や「ヨーロッパ州はだからつながるのだ」というようにEUがまとまりを作っていることが子供たちの中で落ちるのです。では、アフリカ州は、全て当てはまるのではないか。大陸としての大きさも、大きいですし、資源もものすごくたくさんあります。あくまで仮説ですが、大陸の大きさから人口多い。実際、13億人ですが、世界の大陸の中で州という単位で見ると2位です。あの規模で実際13億人なので少ないと思うのですが、そのような予想を立てます。けれど、「アフリカでこんな場면을気にしたことない。見たことない」と生徒に聞きます。貧困、児童労働、教育が整っていない等、負の部分がたくさんあるという授業につなげていきます。そこでまで考えた後に、単元を貫く課題として、「なぜ、アフリカは三原則が揃っていいのに貧しいのだろうか」という問いを立てました。この単元の学習の中でフェアトレードが出てきます。授業を始める前に本当に簡単な消費者教育と関連するようなアンケート調査を実施しています。本校の私が担任しているクラスの生徒が対象です。あまり誘導はしたくなかったので、何の前触れもなしに調査



を行いました。質問1で「良い消費者とはどのような人と言えますか」と聞き、タブレットに打ち込ませました。すると、子供たちの感覚ですが、「効率よくお金を使える人」、「無駄なものを買わない人」、「何らかの目的を持って買ったものをちゃんと消費している人」等の回答がでてきました。

質問2では、「買い物をする時に意識していることは何ですか」と聞きました。値段と予算があるか、財布の中にお金がないのに買ったと子供たち言っていました。他には、品質や本当に欲しいものかどうか、どこの産地で作られているか、店員の態度をすごく意識しているということも分かりました。大方こちらの予想と同じで自分自身にも実際そういう場面がありますが、生産者と消費者の繋がりがやはり薄いということが確認できました。どうしても買う側は買う側の世界しか見えていないということは、子供たちの生活レベルの中にもあることを感じました。そこで、本時の目標は、今回のフェアトレードと絡めて、フェアトレードに関する知識的な部分をおさえて目標を立てました。同時に関連する点として、フェアトレードを知ること、消費者の意識が変わり、世界的な課題が解決する可能性があることに気づかせる授業を行ないました。この授業の全体的なイメージは、「種を撒く」という形です。ほかの教科とつなげて、高校その先へと送っていくような授業ができたらと思いました。そこで本時で使った教材は、2007年に放送された「世界がもし百人の村だったら？」のフジテレビのDVDです。これは、周りの先生方に聞いて教員一年目で活用して、なるほどと思った教材です。ここの中にガーナのカカオ農園で働き続ける兄弟に密着した映像があります。子供たちの会話は、翻訳されているので何を言っているのか分からない点もありますが、実際チョコレートの背景にある生産者側の抱える課題がいろいろな視点で浮き彫りになります。児童労働、男女差別、子供への差別意識、水汲みなども子供に行かせます。教育を受けられない。教育をしていないから男女差別も残るし、地域の考え方も変わらず残る。大人がやりたがらない仕事は、子供がやるべきでしょ、学校は、二の次だよといった点も全部浮き彫りになる教材なので、使いました。本時の授業の流れや様子ですが、まずプランテーションで児童労働が行われています。一日の働く様子、朝4時に起きて1日に食事は2回であると話します。すると、子供たちはぐっと引き込まれます。自分の知らない世界があるようですね。その中で動画を見せていきます。動画を見せていくと、子供達の中でやっぱり何か心に触れるものがあるようです。この動画、あの親近感がわくという言い方は適切でないかもしれませんが、ヤングケアラーなどの経験のある子供たちに響きます。教育を受けられない、児童労働とか、いろいろなところで子供たちの種をまくきっかけになるということを今回も改めて感じました。動画を見せた上で、チョコレートの実際のコストというアメリカのテレビ局がまとめた資料（日本語訳）を活用しました。チョコレートは、店頭で販売されている価格の3%しか生産者には値段が回らないことが分かり、北浜中学校の近くの24時間スーパーで税込95円で売ってたチョコレートは、「それ、いくらになる」と話すと「それは、すごい問題だ」というように、子供達がだんだん生産者と消費者の繋がりを意識し始めるようになりました。子供たちと話していく中で、たどり着いたのが「こういう式になる。消費者大なり生産者だ。この人たちの犠牲の上に、自分たちの豊かな生活が成り立っている。単純な言い方だけどね」という話に流れます。そこでフェアトレードの紹介をしました。子供たちは、このマークも初めてで、「フェアトレード」ということ言葉を知っているのは、1～2人位でした。発展途上国で作られた原料を正しい値段で、

しかも継続的に購入する仕組みだと紹介します。ここでくらしのセンターが発行している資料を実際に使って、概念的な考えを押さえます。こういう仕組みだよっていのを紹介し、実際には、浜松市内にもフェアトレード商品を扱っているお店があることを紹介し、今回広げてみました。たまたま本校の総合的な学習の時間で、有玉にある雑貨プラスフェアトレード晴天さんに職場見学に行きたいとなり、計画をしていました。しかし、コロナによって行けなかったのです。その後、くらしのセンターといろいろ打ち合わせをする際に、「晴天さん」の話が出て実は自分の通勤途中の自宅からの徒歩5分の場所がありました。そこに行って、実際に店主の三室さんからいろんな話を聞き、今回の授業で使わせてもらいました。子供達に紹介した話としては、フェアトレードを絶対にとか気負うものではなくて、気軽に参加するっていったところからスタートしてくれると嬉しいなあというような話をしました。以上のような流れで、授業を終えましたが、感想からは、「フェアトレードを始めて知った」、「生産者がどういう状況なのかが少しわかった」、「これからフェアトレード商品買ってみたい」や、「フェアトレードの商品は買うことはできないかもしれないけれども、値段が。でも生産者のことを考えることができるんじゃないか」っていったような感想が見られました。

社会科の目標は公民としての資質能力の基礎の育成です。それも広い視野に立ってグローバル化する国際社会でということなので、SDGsとも関連していますが、社会科の普段の取り組みの中でも、やっぱり消費者教育と関わる事もございますし、いろんな可能性がある教科だと思えますので、今後も引き続き勉強し続けながら社会科教員としての責務を全うして行きたいと思えます。駆け足になりましたが、実践発表以上になります。ありがとうございました。